《論　文》

人間科学と人間学

生　田　邦　夫

目　次

はじめに
1．人間科学とは何か
2．人間科学の登場
3．人間科学の限界
4．人間学とは何か
5．人間学の開放性
おわりに

はじめに

本学人文学部人間科学科は，1997年度に開設20周年を迎える。この20周年の節目の年を迎えるに当たり，人間科学と人間学とに関わる問題について再考することは，時宜に適うことと思われる。そこで本論では，人間科学の学問それ自体を問うと共に，現代問われている人間の問題状況との関連で，人間学をめぐる課題について考察を進めることにしたい。

1977年に開設された本学人間科学科は，北海道初の唯一の学科であり，全国的に見ても数少ない独自な個性を有する学科であった。まず，この人間科学科開設に当たっての当初理念を振り返ってみよう。人文学部設置の趣意書によれば，人間科学科は「人間と人間生活の諸条件に関する新たな問題状況（環境破壊のとどまることなき進行，資源・食糧危機への予測，現代社会のもとでの人間疎外の深刻化と全面化，若い世代における価値喪失状況の拡大，等々）の発生にともない，人間と人間社会・文化に対するこれまでの細分化され，断片化されたアプローチの限界性が強く意識されつつある現在，真に人間尊重の立場に立つ総合的な人間の科学とそれにもとづく教育システムの創造」[1)]を目指すという基本理念の下に開設されたものである。この基本理念にもとづく人間科学科の主要な教育目標は，一つには「人間と人間社会・文化に関する各個別科学を

中心とした一定の体系的学習＝把握」にあり，二つには「人間と人間の全活動についての生きた総合的知見」[2]の形成にあった。又，これらの教育目標を達成するために，「個々の学問分野を中心とした一定の体系的学習を保証しながら，同時に，学科内の諸科目全体に，いっそう有機的に統合された性格をもたせ」[3]るという教育課程の編成原理が構想されていた。さらに，開設の当初理念では，人間科学科それ自体が，「総合科学としての人間科学とその教授方法の探求という，果てしない課題へのひとつのアプローチに過ぎない」[4]として，人間科学という新たな学問の胎動に連なる一つの挑戦としての性格をもっていたのであった。

上に取り上げた人間科学科開設時の当初理念を見る限り，総合的な人間の科学の構築と教育システムの創造という高邁な教育理想は，現在においても色褪せてはいない。それは近年，人間をめぐる新たな問題状況が多様に発生し，そのいずれをとってもその解決には断片的な知識によってではなく，人間という総合的なヴィジョンに立っての措置が要求されるからである。しかし，総合的な人間の科学の構築と教育システムの創造という教育理想はともかく，本学の人間科学科に関しては，総合的な人間の科学とその教育システムの創造は，現状では依然として停滞を余儀なくされているといえるであろう。それは何故そうであるのか。以下，人間科学という学問の成立基盤を問うと共に，哲学的人間学との関連で，人間学の方向性とその課題について問題提起をしてみたい。

1．人間科学とは何か

人間科学とはいかなる学問であるかは，必ずしも明確である訳ではない。それは人間科学という学問体系が未だ明確な学的内容として確立していないからで，そこから人間科学とは何かという人間科学自体を問う問いが問われることになる。先に述べたように，人間科学科開設の趣意書にある総合的な人間の科学と教育システムの創造とか，人間についての生きた総合的知見と人間的価値観の創造という設置趣意の文章は，人間科学科が拠って立つ基本理念や教育目標を述べたものに過ぎず，人間科学とはいかなる学問であるかを明らかにしたものではなかった。

それでは人間科学の学問像をどのように考えるべきであろうか。人間科学の学問領域に関し，その学問像を構想する試みは行われており，わが国の先駆的著作の中に，その輪郭はある程度示されているということができよう。

例えば，かって大阪大学で人間科学部の創設に関わった徳永恂氏は，「人間科学という名称は，さしあたり“組織シンボル”としては有効であっても“認識シンボル”としては明確ではない」[5]としながらも，「“人間の科学”（science of man）という名称は，今世紀中葉の比較的早い時期から，アメリカなどで，人類学，社会学，心理学などを含めた新しい総合科学の理念として使われてきた。しかしアメリカにおいては，その後このことばは，どちらかと言えば行動科学という名称の陰に隠れていったように見受けられる。……こうして20世紀前半に蓄積された新しい経験と，そこで開拓されたさまざまの方法に基づいて，人間を人間としてトータルに捉えるため

に，従来の諸学問の分類体系を再編成しようとする動きが起こってくる。人間科学ということばは，さしあたり，人文・社会系諸学の分類体系を再編成しようとするこのすぐれて現代的な，歴史的運動から生み出された象徴的表現なのである。……今までの所，人間科学は，従来の分類体系再編への歴史的運動の表現であって，未だその運動は未完であり，新しい分類にまで到達していないからである。こういう胎動は，心理学・精神分析学・人類学・社会学・比較宗教学・神話学・言語学・教育学等々の分野に多発的に発生し，しだいにいわゆる学際的な領域にまで問題化の地平を拡大しつつある。人間科学とは，さしあたり，このような一群の科学にたいする総称であるが，その活動領域は固定的・閉鎖的なものではなく，ピアジェが言うように“人文・社会科学と相蔽い自然科学と連なる”広大な領域にまたがると言っていいであろう。このようになお未定形な運動にとどまるとはいえ，20世紀前半の新しい経験と，そこで獲得されたさまざまの方法に基づいて，人間としての人間をトータルに解明しようとする一群の学問を人間科学と名づけることは，……今や国際的規模で市民権を獲得しつつある。このような“人間科学”の成立は，20世紀における科学史ないし思想史の上で，ある画期的な出来事とさえ言えるであろう」[6]と述べ，人間科学成立の意義を指摘している。

しかし一方，徳永氏は以上のように述べながらも，人間科学の成立に関して幾つかの疑念を表明している。それは「人間科学は，人間としての人間をトータルに認識することができるのか」という点であり，「統一的な人間概念を経験的知見に基づいて総合することができるのか」「人間科学は，人間という対象を経験科学的方法によって捉えるというが，人間についての経験科学は可能なのか。人間とは，対象化を本質とする経験科学の客観的方法では捉えられない自由な主体ではないか」「人間科学は，人間についての知見の総合どころか，その生存理由について疑わしい空語か僭称だということに」なりはしないかという人間科学自体の根拠への疑念である。こうして徳永氏は，人間科学の構築には，「人間についての経験科学という認識論的・存在論的構造についての基礎的省察を欠くことはできない」とし，さらに「人間が人間を科学的に認識するというのはどういうことか。人間科学において人間はいかなるものとして了解され，科学の科学性はいかなるものとして限定されねばならないのか。人間科学の意義と限界はどこにあるのか」[7]という問題の考究にも当たらなければならないことを指摘している。加えて，このような問題を扱う学として「人間科学基礎論」を構想し，哲学の中心課題の一つに据えることを提唱している。

第二に，常磐大学人間科学部が編集した『人間科学のすすめ』が挙げられる。この著作は，常磐大学に入学した新入生を対象に，人間科学とは何かという人間科学の理解を狙いとして書かれた啓蒙書の形式をとっているが，単に学生を対象とするだけでなく，一般人をも対象に常磐大学の人間科学部のアイデンティティを模索し，かつ常磐大学の目指す人間科学の特色を明確化するために書かれたものと捉えることができる。

その中に述べられている点は，「常磐大学にとって“人間科学”はできあがったもの，すでに体系だてられ，われわれの外に完成したものとしてあるのではなく，築いていくもの，これから

成立させていくもの，目標として設定されるもの」[8]であるという。そこで，常磐大学の人間科学が目指すものについて，創設時の市村正二学長は次のような理念をもっていたと書かれている。「人間科学は，ひとことでいうならば，科学・技術の発達によって見失われようとしている生きている全体的な存在としての人間，というこんにちの人間の危機的な状況という認識を基盤とするものである。科学・技術を絶対視する見方，世界観がさまざまの問題を生み出し，人間の価値，尊厳を損なう傾向をもたらしている。そうした危機を克服するには，人間とはなんであるか，ということをあらゆる角度から探求する学問が必要であり，そうした学問的態度をもった人材を生み出す大学が要請される。常磐大学はそのような要請に応えるためにつくられた大学である」。[9] ここで述べられている点は，人間科学とは，今日の人間の危機的な状況を克服するため，人間とは何かをあらゆる角度から探求する学問ということであり，見失われつつある全体的存在としての人間を探求する学問の必要性である。こうして人間をあらゆる角度から探求し，全体としての人間の考究を目指す人間科学が要請されるという。このような人間科学は，全体としての人間をあらゆる角度から考究する所から，極めて総合的で，かつ学際的な性格を帯びた学問像が浮かび上がってくる。しかしながら常磐大学においては，人間科学の総合性と学際性を容認しつつも，総合的な人間研究における総合性をどのように確保するか，学際的な人間研究の組織化と具体化をどのように進めるかについては，未だ十分な成果が上がっていないように見受けられる。そこから「常磐大学の人間科学部は，人間科学への強い志向をもった学部」として，「インターディシプリナリーな研究と教育，といったレベルに安住しない総合性のある研究あるいは教育を求めつづけることになる。つまり，人間科学への志向は必然的に総合性を必要とし，また，総合性を生むのである」[10]として，人間科学への志向性を強調するにとどまっている。

また常磐大学の人間科学は，学問的方法として経験科学としての性格をもつものという合意が成り立っているようである。「一般に経験科学は，……なによりも経験的事実に基づいて，そこから一般的あるいは法則的な知識を導き出すところに特徴がある，といわれる。……一般的に経験科学は，その実証的な方法に本質的な特徴があるといえようが，その実証性は決して単一ではない。しかし，方法上の性格として，幅はあるとしても，経験科学であることをみずからに課すものであることが人間科学には要請されるのである。……諸々の学問の作業の間に共通の言語を確保するためには，経験科学的な方法というものが欠かせなくなる。そういう性格をもってすすめられる研究と教育が目指すものこそが常磐大学でいう人間科学である。志向されるものとしての人間科学である」[11]と結論的に述べている。

第三に，文教大学人間科学部の初代学部長で，同大学の人間科学部の設立に貢献された水島恵一氏は人間学的心理学を構築され，その成果は『人間性心理学体系』全10巻として公刊されている。水島氏によれば，「人間科学（human science）とは通常，生物学，心理学，社会学，人類学，生活学，教育学，児童学などの経験科学の総称，ないしそれらの諸視点を総合して人間をとらえようとする科学だと規定される。それは個々の学問がバラバラに細分化した研究をするだけ

では，全体としての人間を理解することができないという現状認識にたって，現在重視されてきているものである」[12] と捉えているのであるが，水島氏自身の人間学的心理学は，経験科学の諸視点を総合した学，いわゆる科学的人間学の一典型ということができるであろう。

以上のように，先駆的著作の中に述べられている人間科学の学問像は，要約すれば，人間および人間現象をトータルに解明しようとする一群の学問であり，人間に関する個別諸科学を包摂する一群の科学の総称ないしは経験科学を総合した学であると捉えることができるであろう。このような人間科学の学問像は，わが国の大学で，人間科学部や人間関係学科，人間科学科が開設されるに至った学部，学科の設立趣旨に見られるものである。

かくして人間科学とは何かという問いは，現時点で次のように答えることができるであろう。新しく構想されつつある人間科学，あるいは人間の科学（the science of man）とは，人間の存在および人間現象に関連する様々な専門の学問領域が協同することにより，全体として総合された科学として築き上げられていく人間の科学像である。この見方は，人間をトータルに解明しようとする一群の学問ないし一群の科学の総称として，最も広い意味での，いわば総合的な人間の科学とも呼びうるものである。この見方からすれば，人間の存在および人間現象の多様な面を解明しようとする個別諸科学がその中に包摂されることになる。

しかし一方，前述の常磐大学の例や文教大学の水島恵一氏の捉え方に見られるように，人間科学を人間に関わる経験科学の総称，ないしはそれらの諸視点を総合して人間を捉える学問というふうに狭義に捉えることもできる。この場合は，人間科学とは，人間現象に関わる複数の個別経験科学の総称として成り立つことになる。この捉え方からすれば，経験科学としての学問領域が明示されることになり，哲学に基礎をもつ人間学とは，自ずから区分された領域を占めることになる。それは人間現象の経験的事実を対象にして，それに基づいて普遍化の視点を導き出すところに特色があるからである。

2．人間科学の登場

人間科学なる学問が登場することになった理由は，20世紀に入ってから諸科学の顕著な発達と無関係ではない。過去１世紀にわたる科学全般の発達傾向は，人間に関する諸科学をも著しく発展に導いた。その結果，人間に関する諸科学の諸領域が細分化されると同時に，一科学の学問領域の奥行きが深く専門化されて，学問領域毎に，それぞれ独自の学問体系が形成されることになった。このような科学の学問領域内での細分化と専門化傾向は，様々な問題を生み出すことになる。学問分野の細分化と専門化傾向は，科学全般の発展過程では必然であったとも見なされようが，一面そこには問題がなかった訳ではない。そのうちの一つの大きな問題は，閉じられた専門性の弊害といわれる事態である。アメリカの文化人類学者ラルフ・リントン（Ralph Linton）が，すでに1930年代に科学自体の原子化的傾向，すなわち科学のアトム化の問題として，このことを取り上げて批判しているのは，まさに至言であったといわなければならない。リントンは，

次のように述べている。「科学は，その生存権を獲得するや否や，アミーバのような分裂過程をもって拡がり出した。それはもはや一個の学問ではなくなり，その代わり，各自にそれぞれ自己の興味と厳重に区切られた専門の課題とをもった一系列の科学となったのである。……過去百年の間の傾向は，それぞれの科学が他の科学を適当に敬遠して，各自の選んだ牧場の草を喰み，ますます少数の事がらについてますます多くを知ろうとすることであった」。[13] リントンは，さらに人類学という学問領域においても，「その最善の意図をもってしてもなお，科学一般を特徴づけて来た原子化的傾向を避けることはできなかった。人類学が網羅しようとした分野は，極めて広大で多くの異なった種類の現象を包含するため，いかなる個人も一人でその全体に精通することはできない。従ってそれはおきまりの型通りの分裂過程をたどり，多数の分科諸科学に分かれて，その各々がそれぞれその専門家の群を生み出した」[14] と指摘している。リントンが述べているように，科学のアトム化的傾向が人類学という個別の学問領域内で進行しているならば，それは同時に人間と関わる諸科学も多数の分科諸科学への分化を余儀なくされていることであり，そこからはともすれば人間自体が見失われて，ある意味で閉じられた専門性の弊害を生み出すことになる。この閉じられた専門性の弊害というのは，全体的な見通しと理解に立つことなく，個別の特定領域のみをもっぱら近視眼的に研究する学問傾向のことを指す。他の領域との相互連関や総合的全体的な視野を欠いた狭い範囲に閉じこもる学問傾向をいうのである。

しかし，こうした人間と関わる諸科学の細分化と専門化傾向による専門性の弊害に対し，特に近年反省が求められ，かかる傾向を転換し，細分化し専門化した学問体系を集約し総合しようとする新たな科学像や総合的な学問体系の必要性が叫ばれるに至った。それは閉じられた専門性の弊害を克服して，人間に対する全体的で総合的なパースペクティブの回復を目指す学問体系の要請である。

ところで，本来科学的研究・教育の場である大学自体が，科学性を欠いた知的閉塞性に陥っている傾向を鋭く指摘したのは，上智大学の長島正氏である。[15] 長島氏は，スペインの哲学者であり思想家であったオルテガ・イ・ガセット（José Ortega y Gasset）の『大学の使命』『大衆の反逆』に展開されている所論を引用して，近代科学の分科主義的傾向によって生ずる知的閉塞性の問題が，最も知性的であるべき大学に様々な形で根強く存在していることを指摘する。知的閉塞性の問題とは，「一つの特定科学だけしか知らず，しかもその科学のうちでも，自分が積極的に研究しているごく小さな部分しか知らない人間」[16] のことであり，「自己の限界内に閉じこもりそこで慢心する人間」[17] に陥ってしまうような科学者をはじめとする専門家の知的関心の狭小性を指すものである。そしてこの知的閉塞性の体質が大学において根底から刷新されない限り，大学および学部学科が目指す高邁な理念は決して実を結ぶことはないというのである。こうして，知的閉塞性を克服する方向として，広く知識の総合的な研究・教育の場としての大学の在り方の改革を提起している。

長島氏は，その際知識の総合性に関して基本的に二つの側面があると指摘している。第一に

は，諸科学の有機的統一による専門的知識の総合という，学問体系における総合という点と，第二には，諸科学とその研究主体との統合という，学問における研究者の主体性の確立による人間的統一という二つの面である。

第一の点については，「高度に知識が専門分化した時代において，一個別大学の次元で“すべての知識の総合”を図ることは明らかに不可能である。……現存の研究・教育組織である学部学科の有機的な相互交流の有無をみても明らかである。そこでは，共通のテーマに関して個々の学部学科の次元を越えた総合研究を促進させるような弾力性が欠けていたし，また教育面でも，カリキュラム編成においてそのような相互の必要性が十分に認識されていなかったように，“たこつぼ的”な性格が支配していたといえよう。……しかし，実際に知識の総合を図ろうとするならば，遠心的に分岐する科学に対応し，それと異なった発想に立ったところから求心的に作用する運動としての“知識の総合化”が改めて試みられなければならない」[18] と指摘している。

第二の点については，「学問の人間的統一の面をみるならば，近代科学の分科主義と客観主義のもとで，科学の分化＝抽象化＝客観化＝非人称化過程が進行する反面，学問に関わる人間主体の在り方が不問にされ，曖昧にされてきたために，学問とその営みの主体である人間との分離がもたらされてきた。……しかし，このような両者の分断的な状況においては，学問が根本的に人間の主体的な営為の上に成り立つ，高度に人間的なものであることが忘れられる。そして結局は，研究主体は抽象化された科学の中に人間としての総体性を喪失した部分的存在＝専門人として従属していくことになる。一方，根を失った学問は，遠心的な分化過程の中で益々抽象化しつつ，それ自体の人間全体に対する位置づけを失っていく以外にない。高度の技術的な知識を持ち合わせていながら，それを本来の人間的な意味の世界に秩序づけることができず，自らが機能的な連関の単なる歯車と堕している人間の姿は前者の例であり，また専ら観念上の営みにとどまり，現実の要請に無力な理論は後者の例である」[19] と述べて，諸科学を人間全体にとって意味あらしめる学問の人間的統一に言及していることは注目すべき論点であろう。

他方，現代の社会や文明が進展するに伴い，次第に自然と人間との調和が失われるという状況が生ずることになった。人間と自然との距離が広がり，自然界の調和が失われて，そこから様々な問題状況が発生するに至った。例えば，公害の発生や環境汚染，地球の温暖化などは，現代文明がもたらした工業化の伸展，都市化の進行，国土開発の進展と密接に関連しており，人間の外なる自然の喪失の危機である。それは，ひいては人間の内なる自然の喪失の危機となって現れる。例えば，性犯罪，暴力行為，殺人事件，いじめ，不登校，心身症，精神病などの個人レベルの病理現象から，社会レベルの凶悪犯罪，謀略事件といった社会病理現象の発生に連なり，切実な問題状況におかれている。これら一連の現象は，技術の進歩，情報化の進展，文化の大衆化，物資生産規模の拡大，商品経済至上主義，社会制度や組織の巨大化，複雑化などと微妙に絡み合いながら発現してくる。

このような人間と関わる様々な問題状況の発生は，どの一つを取り上げてみても，人間現象で

あり社会現象であるために，その問題の全体的な解明と実践的な解決のためには，異なった様々な視点からの解明が必要とされるのである。例えば，オウム真理教なる一新宗教団体が引き起こした前代未聞の凶悪な事件を取り上げてみても，なぜこのような恐ろしい事件が，表面上平和に見えるわが国において起こったのか，この事件発生の社会的背景や根本的原因，その動機は何か，さらに同様な事件の再発防止策を含む事件の総合的全体的な解明ということになると，異なった様々な立場からの研究や課題解決が求められることになる。

前述した閉じられた専門性の弊害を克服するに足る総合的な人間研究の科学という学問レベルの要請にしても，今触れた具体的で切実な問題状況の解明や問題解決の必要性という実践レベルの要請にしても，科学，殊に人間とその諸問題を扱う諸科学を新しく総合することが，今まさに求められているのである。

新しく登場することになった人間科学は，個別科学の専門の境界に閉ざされることのない人間とその諸問題に関わる専門領域相互間の協同によって築き上げられる広範囲の総合された人間の科学像である。そこで目指されるものは，個別科学の境界を越えた共同研究や学際的研究を通して実現せられる知的結果の総合，あるいは諸視点の総合に基づく一定の普遍化の視点を作り上げることである。従って，人間科学とは，広義においては，人間の存在，および人間現象，人間の諸問題に関する個別諸科学の総称，又はそれらを包摂する集合的名称としての意味をもち，研究方法としては共同研究や学際的研究の方法を取り入れた人間に関する科学的研究の全体像であるということができるであろう。

3．人間科学の限界

前述のような立脚点の下に要請された人間科学も，この科学の現実は人間と人間現象に関わる共同研究や学際的研究が必ずしも進まず，人間に関する諸視点の総合に基づく一定の普遍化の視点を導き出すところまで到達していないのが現状であるように見受けられる。人間の存在および人間現象は，それ自体が多面的で重層構造をもち，その解明の方向により多様な学問分野が成立しており，かつその研究視点は多岐にわたることはむしろ当然である。どのような科学者であっても，多様な学問分野の全領域に通暁することは全く不可能である。このような場合，人間に関する研究上の諸視点の総合は，いかにして可能であろうか。又，諸視点の総合に基づく普遍化は，いかにして作り上げられるであろうか。この点で，総合的視点に基づいて人間の全体像を捉えようとする人間科学は，理念上はともかくも，その具現化の過程で困難な課題を抱えているということができるであろう。その理由の一つは，人間科学が拠って立つ科学自体の特質にあると考えられる。かくして人間科学の理念は，その概念規定に述べられている知的結果の総合，あるいは諸視点の総合という総合化の視点をどのように確立するかという問題で，暗礁に乗り上げているように見受けられるのである。

例えば，すでに述べたように，常盤大学の人間科学部は，人間科学の成立を目指す「強い志向

をもった学部」であるということであり，そこには総合性の志向が強く見いだされるが，人間科学の総合性をどのようなものとして築き上げるかは十分に明確ではないとされ，未だ総合性を目指す研究と教育の要請の段階に留まっているようである。

ところで，人間および人間現象，人間の諸問題を研究しようとする場合，研究者は必然的にある特定の研究視点に立たなければならないものである。それは人間の存在，および人間現象自体が多面的で，かつ重層的な様相を呈し，多くの異なった種類の対象を含んでいるからである。研究者は，そのうちのある特定の学問領域を専攻せざるを得ず，したがって特定の研究の一視点，一つの立場に立つことになり，今日存在する人間研究の全領域を対象とすることは不可能である。その意味で人間現象，あるいは人間の諸問題の全体を包摂するような全体の人間の科学，あるいは唯一の全体的人間科学というような学問体系は，現実には成立し得ないのである。

それ故，人間科学は人間に関する科学的研究の総体であり，その基盤はつねに複数の個別諸科学としてのみありうるのである。例えば，人間生物学，心理学，精神医学，社会学，人類学，歴史学，政治学，経済学，人文地理学など，多様な人間および人間現象の科学的研究は，広い範囲の人間科学に包摂されることになる。ただし，シュトラッサーが『人間科学の理念』で述べているように，人間科学は人間に関するすべての科学を包摂するのではなく，自然から区別される「人間を人間たらしめている特殊性が問題にされる」[20]，あるいは「自分で自分自身の環境世界を創り出し形成する者」[21]としての人間を対象とする科学であると限定して捉える見方もある。いずれにせよ，人間の科学的研究の各分野は，人間に関する多種多様な研究成果と知識をわれわれに与えてきた。さらに，人間科学の現実は，これらの研究の各分野を含んでいる故に，そこでの研究はそれぞれ区分された個別領域内で今後ますます多様な研究成果と知識を積み重ねていくであろうと予想される。

しかしながら，人間科学の個別領域内での多様な知識の集積は，人間についての全体的で統一的な見解に統合されるものではなく，さらに必ずしも全体としての人間の理解に結び付くものではないということも一面の事実である。この点，カール・ヤスパース（Karl Jaspers）の科学論の根本思想は，科学自体の限界を指摘したものとして示唆に富むものである。ヤスパースは，『現代における理性と反理性』において，科学的知識のもつ制約ないし限界を述べているのであるが，それは科学研究の方法論的な反省により，われわれの科学観を正しく導くためである。「世界のなかでの知は，いかなる知にもせよ，局部的な対象にかかわるものであり，特定の方法を用い特定の立場に立って得られたものである。それゆえ何かある一つの知を絶対化して一個の全体知となすのは誤りである」。[22] ここに，ヤスパースの科学論の根本思想を見ることができる。すなわち，すべての科学的知識は，特殊な諸々の対象に関係するものであって，一切の存在を対象とするものではない。又，それは一定の諸々の方法によって，一定の諸々の立場から獲得されるものである。科学は普遍妥当性をもつ客観性を求めるものであるが，「現実の科学は，一定の立場から，一定の方法により，一定の対象について探求する個別的諸科学として存在するのであって，

唯一の科学は成立せず，科学は諸科学であり，具体的には同じ名で呼ばれる科学でもその立場・方法・対象の相違により，それぞれ異なる多くの科学的知識内容ないし体系となるのである」。[23]科学は，いかなるものも一定の立場，一定の方法，そして一定の対象についての認識であり，したがって全体の科学や唯一の総体科学や全体知ではない。すなわち，科学は常に特殊な対象の一側面についての認識でしかありえないのであり，対象の全体を包括的に統一的に捉えることはできない。科学は，存在のすべてを包括する全体の科学，あるいは唯一の科学ではありえないのである。「何となれば，いずれの科学も，すべての立場（視点）からなされることはなく，すべての方法によって探求されるものでもなく，すべての対象を認識するものでもないからである。……認識（客観的認識）は，どこまでも科学のみの任務であるが，この科学は限界を有し，一定の立場・方法・対象に関する限りの普遍妥当性を探求しうるにすぎないのである」。[24]勿論，この考え方は科学の客観的認識を否定するものではない。しかし，立場の相違や研究の方向，手段方法の相違，そして研究対象の相違によって，科学的知識は多様性をもつことは必然である。ヤスパースは，又『歴史の根源と目標』の中で，次のように述べている。「近代科学は単に普遍的であるだけでなく，諸科学の統一を期待して生きているが，しかし統一は決して実在しないのである。各科学は方法と対象により制約されている。どれもが世界へ向けられた一展望ではあるが，どれも世界を把握しない。どれもが現実の一断面をいい当てているいるが，現実そのものをではない。おのおのはおそらく，およそ現実の一面ではあるが，全体としての現実に該当しない。もろもろの特殊科学は存在するが，現実的世界全体に関する学としての一なる科学は存在しない。このようにおよそ科学なるものは特殊的，専門的，分科的であり，しかもおのおのは，境界もなく，しかもまとめられたひとつの世界に属しているのである」。[25]以上のような科学的知識の制約ないし限界を知るならば，人間という存在および人間現象を科学の立場で解明し，総合的な諸視点において捉えようとする場合も，全体としての人間理解は不可能であり，やはり一面的であることを免れないのである。科学には，科学自体のもつ限界があるのであり，この限界の自覚に立つならば，人間科学といえども人間の存在および人間現象の解明において万能ではありえないことを知るべきであろう。

このように，科学自体のもつ限界という根本的な問題の他に，人間および人間現象を科学的に研究する総合的な人間研究は，それ自体多様な個別諸科学，すなわち人文科学や社会科学，あるいは自然科学の一部を包摂したものでなければならず，そのような人間科学を実際に具体化することは，極めて困難な課題であると考えられる。総合的な人間研究といっても人間現象の一つの面に関する個別科学の成果の集合，あるいは共同研究の成果以外にはありえない。したがって人間科学は，理念上はともかく，具体的には個別科学の境界を取り払って，一つに集約された総合的な人間研究として具現されなければならないのであるから，決して容易なことではない。特に，人間の存在に関する探求において，人間とは何かというような人間それ自体への根本的で原理的な問いについては，狭義の人間科学による様々の異なる分野からの研究成果を俟って体系化

しようとしても，それは人間についての多面的な様相の知識の寄せ集めに過ぎず，前記の問いに対して諸視点を総合して統一的な見解を与えることは困難なことであろう。人間科学は，おそらく人間とは何かという問いを無際限に問い続けていくことになろう。現有の人間に関する個別科学，あるいは人間についての経験科学が，これまで以上に精緻な知識を積み重ねたとしても，それによって全体としての人間の存在が解き明かされたことにはならないのである。まさに人間の存在は，身体的には生命と呼ばれ，精神的には人格性と呼ばれているが，人間の生命や人格性は全体としては解明し尽くしえないものであり，ただ解明する探求の方向を示すつねに未知なるものであることを知る必要があるであろう。かくして，人間科学の限界を知ると共に，人間の存在および人間現象の多面的で重層的な様相を解き明かすために，人間科学とは立場と方法の異なる人間学の領域が考察の対象として浮かび上がってくるのである。

4．人間学とは何か

人間科学は，前節で述べたように，人間および人間現象を解明する諸科学を包摂する一群の科学の総称であった。この人間に関する諸科学，例えば，人間生物学，心理学，精神医学，社会学，人類学，歴史学，政治学，経済学，人文地理学などは，それぞれのさらに分化した個別の学問分野で，人間の多面的な様相について部分的な知識を豊富に積み重ねるに至った。しかし，それらの豊富な研究成果によっても依然として不明なことは，人間とは何かという人間の本質についての根本的な問いに対する答えである。現代の哲学的人間学の創始者とされるマックス・シェーラー（Max Scheler）は，このことをすでに1920年代に次のように明言している。「われわれは相互に関係しあうことのない自然科学的人間学，哲学的人間学，神学的人間学を所有してはいる。しかしわれわれは人間に関する統一的理念を所有してはいないのである。人間の研究にたずさわる特殊科学はしだいにその数をましているが，それら諸科学はどんなに価値あるものであるにしても，人間の本質というものを解明するというより，むしろはるかに蔽い隠してしまう。……これまで人間が歴史のどの時代においても現代におけるほどに問題的となったことは，かつてなかったと言えるのである」。[26] さらに，シェーラーは1926年の論文「人間と歴史」の中で次のように述べている。「現代ほど人間の本質と起源に関する見解が曖昧で多様であった時代はない。……われわれの時代は，およそ一万年の歴史をつうじて人間がみずからにとって余すところなく完全に“疑問”となり，人間とは何かを人間が知らず，しかも自分がそれを知らないということを人間が知ってもいる最初の時代である。……」[27]

マックス・シェーラーの上述の文章の中に，人間学の課題が垣間見られるのであるが，それはシェーラーの意図した哲学的人間学の目指す課題であった。それは人間に関する諸科学の成果に寄与を求めながら，人間とは何かという人間の本質の解明を目指す学であるということができる。ここに人間に関する個別諸科学としての人間科学とこの人間科学と密接な関連をもちつつも，立場と方法の異なる独自な学的領域を構想する人間学との相違が問題となる。

一体，人間学とは何であるのか。人間学とは何かの問いに答える手掛かりとして，人間科学の学問像の場合と同様，先駆的著作の中に示されている人間学の輪郭を浮き彫りにしてみよう。まず，人間学誕生の原点というべき哲学的人間学と関わる著作から引用してみよう。藤田健治氏は，『哲学的人間学』の中で次のように語っている。「哲学がいかなる問題を取りあつかうにもせよ，その世界観・人生観の根本において人間とは何かという問いに出逢わざるを得ないということは，人間にとって人間が最も切実な存在であり，何よりも深い関心のある重大な存在だからである」。[28)]

又，生命倫理学者である上智大学のホアン・マシア氏は，やはり哲学的立場に立つ人間学を構想しているのであるが，人間学の課題を次のように指摘している。「人間についての諸科学が発展してきたけれども，その結果として出てきたものを（長所短所を合わせて）考えてみると，人間についての哲学的な考察がいかに必要であるかが明らかにされると思う。たとえば医学の著しい進歩によって，従来考えられなかったような心臓移植などが実現できるようになった。ところが，まさにその手術をめぐって，倫理問題が起こったということも周知のとおりである。そこで人間の諸科学の進歩によって，それらの科学の専門分野を越える問題が現われてくることが分かるが，そういった問題に取り組むときに，いったいわれわれはどういう人間理解に基づいて人間の行くべき道について判断するのであろうか。その問いに答えるのは，人間についての科学より，人間の哲学の課題であるといわなければならないであろう」。[29)] このように述べ，さらに人間学と人間科学との関連を四つの視点から指摘している。(1)人間に関する諸科学間の方法論的なつながりを求め，それらの諸科学に示唆される人間についてのさまざまな前提について研究する必要がある。この研究は個々の学問の分野や文化の相違を超えた次元で行われなければならないこと。(2)個々の学問の枠にとらわれない学際的立場からの交流が行われるとしても，それが人間に関する幾つかの科学のあいだでのみ行われるならば，やはり十分なものといえず，それら諸科学と哲学とのあいだに実り多い対話がなされる必要があること，(3)哲学でいう人間学とは，単に人間に関する諸科学を統轄する役割を果たすものとのみ考えるのは狭い見方のように思われる。人間学はそれらの諸科学との接触を断つことなく，しかも人間全体に関する究極の問題の追究において，独自の立場を保つものであること。(4)哲学的人間学の探求には，方法論的・言語学的・認識論的基礎に立脚した深い予備的省察が必要であり，これがなくては人間学の進歩・発展を望むことはむずかしいことであると述べている点[30)]は，重要な指摘である。

さらには，人間としてあるべき自己に対する思索と実践を促す道標として，哲学的人間学の立場から人間の探究を試みている一著作の中に，明瞭な人間学的問いが見出される。「“人間とは一体何であるか。”これは人間が繰り返し自らに問いつづけてきたものである。人間の歴史を一言で尽せば，この問いの歴史であったと言ってよいだろう。この問いは，社会と文化の流れの中にあって，さまざまな生活環境に応じて最後的に人間の心の中に生まれずにはいないものである。しかし，人間はこの問いに対して有効にして確信のある解答を出すことなく今日を迎えてい

る。今世紀に至るまで，人間の英知が構築してきた文化・文明は，とりわけ科学と技術の領域で目覚ましい進歩と発展を遂げてきた。だがしかし，自然に向かう科学の翼は天翔るとも，人間性を求める精神の翼がそれに伴っていない。われわれの知るとおり，これまでに予想もしなかった害悪や危機の状況のなかに人間はさらされているのである。進歩・発展も害悪・危機も，共に人間自身の英知が作りあげてきたものだけに，そこには矛盾と悲惨さ，不安と懐疑，それにまた歓喜と絶望，悲観と楽観など，中間のない状況が繰り広げられている。悪しき意味での人間中心主義は，いま独善の思いをすてて，正しいヒューマニズムの棲家に帰らねばならぬ時である。こうした事態を目の前にして，われわれは人間そのものを，いま冷静に見据える時期であることを痛切に感じている者である。あくまでも根拠のある確信をもった英知と行動を望むからである」。[31)]

ここで，新しい哲学的人間学の体系的展開を試行している金子晴勇氏の人間学の概念を取り上げてみよう。金子氏は，いまだ試論の域を脱していないとしながら，諸科学の成果を受容しながら展開している人間学とはいかなる学問であるかの問いに対して，次のように答えている。「現代は一般に“人間学の時代”であるといわれている。それは人間に関する諸科学の研究が大いに進み，その巨大な成果が発表されるにいたっているからである。しかし，同時に，そこから来る情報の氾濫と価値観の多様化により，思想上の混迷が深まっていることも否定できない事実である。したがって，人間に関する諸科学の成果を受容しながら，感性・理性・霊性からなる人間の全体像を再建することが，今日，哲学に従事するものに課せられた共通の課題になってきている。この全体像は，人間が自己・他者・世界という三大領域に関わって存在している現実を，身体・環境・言語・心理・倫理・社会・文化・歴史・宗教などの具体的関連の中で学問的に検討していくことによって，しだいにそこに向かって近づくことによってのみ獲得されるであろう」。[32)]
さらには，「この種の人間学は“自然人類学”や“文化人類学”とは区別されており，昔から“人間に関する理論的な総合的研究”として哲学の一部門に属し，“哲学的人間学”と呼ばれてきた。人類学が一般に人間の経験的側面をそれぞれの専門の視点から研究し，人間という全体テーマの一部分を問題にしているのに対し，哲学的人間学は人間の全体を理論的に考察しようとする」[33)]と述べて，人間学は人間の全体像を理論的に総合的に考察する学問であると捉えている。ただし，現代の人間学は哲学的人間学のみならず多方面にわたり発展してきているが，必ずしも思想的に統一されたものではないという問題点をも指摘している。「生物学・医学・社会学・心理学・経済学・政治学などの分野から人間学的解明の試みが続々として発表されるに至った。しかるに諸科学により解明された人間についての豊かな成果は必ずしも思想的に統一されたものではなく，それぞれの学問的立場から企図された学説を検討するならば，人間性の統一というものは極めて疑わしくなってくる。つまり経験的事実として提示されているものも最初からある特定の個人的な前提・立場・世界観・イデオロギーから導き出されている場合が多い。したがってそこでは個人的因子が決定的役割を演じており，個人の気質や傾向性が研究方向を決定している」。[34)]

以上が，哲学的人間学と関わる著作に述べられている人間学の輪郭である。これらの内容からほぼ人間学の原点を探ることができると考えられるが，わが国では，哲学的人間学以外にも多様な人間学が成立しているという現実がある。それは一種の人間学の氾濫といった事態である。わが国で，これまで人間学という表題を付した著書や翻訳書は多数出版されており，さらに今日の大学改革の流れの中で，大学の授業科目の中にも人間学なる学科目が登場することになった。又，新しく哲学から人間学への授業科目の名称変更が行われている大学も見られる。現代は，金子晴勇氏が述べたのとは違う意味で「人間学の時代」といわれるかも知れない。世に出ている人間学という名の著作の内容は，必ずしもアカデミックな内容とは限らないものも多く，著者によって盛り込む内容は種々様々である。又，大学における人間学の学科目の内容や人間学専攻の内実，人間学概論や人間学各論の内容構成に関しても既成の学問体系として確立されている訳ではない。そこから，ある特定の状況下における人間行動を解明する研究に関して人間学なる名称が用いられたり，場合によっては全く学的内容とは異なる通俗的な雑誌記事，例えば財界著名人の人物誌や人物評伝などに人間学なる名称を付けたりして，その内容は極めて多様である。情報の氾濫と価値観の多様性は，人間学の領域にも波及してきた感がある。人間学の現状は，いわば多様な人間現象の諸事実に対し，様々な動機からアプローチを試みる人間解明の手法に対して与えられる錯綜した内容を示すものになっていることも事実である。思想上の混迷は，人間学に関しても例外ではない。

それでは，人間学なる名称によって展開されている人間の考察をどのように考えるべきであろうか。人間学とは多種多様な人間と人間現象の解明を目指す試みに付する単なる一般的な呼称に過ぎないものであろうか。もしそうであるならば，人間に関する考察をなす人間観を含む，あらゆる種類の人間の考察や人間研究，人間論すら人間学と呼びうることになる。こうなると，各人各様の人間学が成立することもあり得よう。しかし，このような人間の考察や個別的な人間観をすべて人間学に含めることはできないのは当然のことといえる。

ここで，文教大学の水島恵一氏の見解を取り上げてみよう。水島氏は，人間学を人間科学とは関連をもちつつも異なる領域の学と捉えている。すなわち，人間学は経験科学の総称としての人間科学というよりも，人間科学の総合の視点，あるいはさらに科学では扱い得ない人間存在の価値や意味志向性，人間性の本質にまで入り込んだ解明を目指す学的領域を含むものと捉えている。水島氏は，次のように述べている。「人間学とは，最近の学会の通念としては（経験科学としての人類学を意味する場合は別として）人間科学の総合に立ちながらも，1)何らかの意味で，人間を全体的，本質的にとらえようとすること，2)とくに主体性・志向性・価値・実存など従来の経験科学に含まれなかった人間性を問題にすること，3)したがって何らかの意味で，哲学，文学，芸術，宗教などとの接点をもつことを意味していることが多い。ただし，既成の学問領域を超えて人間それ自体を探求することをもって漠然と“人間学”と呼ぶこともあり，概念規定は一定していないのが現状である」。[35] この人間学の学問像によれば，経験科学としての心理学や社会

学，人類学，人間生物学などの科学的知見を踏まえつつも，なおそれらの科学的考察の成果では迫り切れない人間の本質や人間性の奥義にまで大胆に踏み込んだ人間の本質の探究を目指していることがうかがわれる。

このような人間学の学的視点は，水島氏の「人間学的心理学」の構想に一層明瞭に認められるものである。「人間学的心理学」は，いまだ統一的な学的名称となっていないと述べているが，それは「行動主義を典型とした実験的操作的心理学に対して，主体としての人間の実存あるいは全体的人間性ないしその本質を問題にし，個別性，ユニークさを重んじ，その体験を生きた具体的な姿において理解」[36] しようとするものであることが指摘されている。そこでは，「ナマの全体的人間性」や「本質的な人間性が，自己実現ないし，人格的，精神的発展の見地から明確化される。とくに人間が単なる条件づけられた装置でもなく，また生物学的衝動の所産でもないという見地が人間学的観点として端的にうちだされている」[37] とする。したがって，人間の内的本性である人間性は，明確な人間学的視点で捉えられており，「“人間的価値”が何らかの意味で問われ，価値実現，意味志向性，人間的成長といった」[38] 視点において考察されている。このような学的視点は，人間学の立場と課題を理解する上で，一つの明確な根拠を示すものと考えられる。

上述の見解から，人間学の学的領域は人間科学との関連において明らかにされる。既に述べたように，人間科学は狭義に捉える場合，人間に関する経験科学の総称ということになるが，一方人間学は経験科学では扱い得ない人間的価値の問題や意味志向性の問題，人間存在の本質や原理の問題にまで掘り下げて根本的に考察しようとするのである。しかしこのことは，人間学が人間科学の成果としての科学知を排除することではなく，それらの成果に寄与を求めながらも，進んで人間の本質や人間性の奥義にまで解明の手をのばそうとする。このような人間学の学的方法は，本来的に人間的なるものの本質や原理の探求を目指す哲学的考察の方法と密接な関連をもつ点において，狭義の人間科学の学的方法とは区別されることになろう。

以上，先駆的著作の中に述べられているところから，大体人間学とは何であるか，その輪郭を述べることができると思うが，ここで筆者の考え方をまとめて述べてみよう。

人間学とは何かという，その理念や目標を明らかにするためには，人間学誕生の原点ともいうべき哲学的人間学の学的視点に立脚することが肝要である。その上で，人間学の輪郭を示すならば次のようにいうことができるであろう。

人間学は，根本において人間とは何かを問うものである。しかも，とりわけ人間とは何かの問いに対して，人間の存在および人間現象を深く掘り下げることにより，人間が人間である限りの普遍的で本質的な人間像，あるいは根本的に人間的なるもの，本来的な人間のありかたを全体像として捉える視点で探求しようとするものである。換言すれば，人間学は人間の存在および人間現象の解明を通して人間それ自体の本質と原理の探求であり，かかる本質や原理に基づいて人間理解の視点を呈示しようとするものである。当然のことながら，それは断片的部分的ではなく，つねに全体的統一的な視点に立って人間それ自体の本質を解明するものである。

しかしながら，人間とは何かの問いは，人間科学の諸領域においても等しく問われるものである。人間科学の諸領域においては，人間および人間現象は一つの客観的事実として扱われ，その対象の一側面が観察や実験，あるいは調査などの実証的方法を用いて解明されることになる。そこでは経験的事実の世界，あるいは具体的で客観的な世界における人間現象を実証的に研究することにより，究極的には人間現象を一貫する普遍化の視点，またはそこに認められる法則性を探求しようとするものである。これに対して，人間学はかかる人間科学の学的成果を排除せず，その成果を踏まえながら，さらにその学的領域を越えて，人間現象の根底に見いだされる本質と原理，あるいは人間現象をそのように在らしめる意味の視点をも究明しようとする。人間学は，かくして人間それ自体の本質や原理の探究を目指すところから，すでに述べたように経験科学的方法を越えた哲学的考察の方法に基づく学的体系へと収斂されていくという方向性が認められるものである。この点，人間学は人間科学と区別される学的視点に立つことになるということができるであろう。

5．人間学の開放性

人間学の輪郭は，前節で述べたところでほぼ尽きると思われるが，人間学の内実を具体的にどのように構想するかについては，決して確定している訳ではない。人間学の輪郭は，いわば理念として述べられた課題であり方法を示しただけに過ぎない。ところで人間学は，決して閉じられた完結を目指す学問ではあり得ない。人間学により人間の存在および人間現象の解明を通して人間の本質や原理の探究がなされるにせよ，それは完結された学問体系を目指すというより，それはあくまでも一面の人間学的探究であるということである。このことは，人間学が人間の本質や原理の探究に向かって様々な視点から絶えざる問いを続けていく途上にある学の性格をもつことを意味する。人間学が絶えざる問いの形で成立するのは，人間の存在自体が多面的な様相をもち，つねに解明し尽くしえないものを含む未知なる存在であるからである。人間とは何かの問いは，定義し難い特質をもっている。何らかの立場や視点から人間を定義しても，その一面性は免れえないし，さらに異なった立場からの他の一面の定義が成立する。したがって，人間学が目指す人間とは何かという根源的な問いは，決して終結することなく，つねに開かれた問いとしてあり続けることになる。このことは，人間のうちに秘められた人間性の豊かさを示すものである。人間学は，この秘められている人間の存在と人間現象の多様性に向かって絶えずその問いを新たに追究し続けるところに課題があるといえる。このことは人間の存在様相の解明に，それぞれ独自の，しかも多様な人間学的探究が展開されていく可能性を示している。例えば，現に学的内容をもつ人間学的研究の成果を取り上げてみても，哲学的人間学はもとより，現象学的人間学，人間学的心理学，教育学的人間学，キリスト教人間学，仏教人間学など多様に分化した内容で成立していることから，人間学の開放性が理解されるであろう。このように人間学は，開放された問いの形で様々な視点と立場から分化し展開しつつ，それぞれが一定の学問体系へと収斂されてい

くものと考えられるのである。

筆者の専門とする宗教学の視点からの人間学も，多様な人間学的探究の一分野をになう学である。しかし宗教学的人間学という名称は，学会の通念として明確に根拠づけられた内容をもって確立している訳ではない。現状では，未だ仮説的構想の段階にあるといえる。宗教現象は，多面的な構成要素から成る包括的体系であるが，宗教そのものの担い手はあくまでも人間である。宗教は人間と切り離し得ず，又それは人間の生きるいとなみ，あるいは人間の具体的な生と密接に関わって成り立っているものである。この具体的に生きる人間の存在様相と生の構造的特性を宗教学的視点から掘り下げて考察することによって，宗教を成立させている人間の本質や原理が解明されることになろう。宗教学的人間学の人間理解から，人間についてのより深い洞察が得られるものと考えるのである。

最後に，人間学の開放性を示す人間学研究の実例として，筆者が会員である上智大学人間学会の事例を紹介してみよう。上智大学人間学会は，1973年に上智大学で創設された人間学研究の学会組織である。この学会は，上智大学人間学会という名称が示すとおり，上智大学の学内学会の形をとっているが，上智大学以外の研究者にも広く開放されており，現在会員の所属する教育・研究機関は，全国30大学，４高等学校他に上っている。

この学会では，人間学会学術大会を年一回上智大学あるいは全国各地で開催している。又，1992年からは，学術大会に続いて「人間学セミナー」が毎年開催されている。「人間学セミナー」は，人間学研究の向上のために，諸科学の分野の専門家を招いて開かれるセミナーで，学会員以外にも広く開放されている。このように上智大学人間学会は，学術大会，学会誌『人間学紀要』の発行，「人間学セミナー」を通じて人間学に関する諸研究活動を推進し，人間教育に携わる教員間の研究交流と相互協力に努めている。学会の機関誌，年刊の『人間学紀要』は，すでに26号の発行を数え，発表された人間学研究の論文は多数に上っている。これらの論文は，この学会独自の，しかも多様な人間学研究の展開の一つの方向性を示すものということができる。

上智大学の人間学研究は，カリキュラム中におかれた総合コース「人間学」に関連づけられている所に特色が見られる。この「“人間学”の概念は，英語でいう philosophical anthropology ないし philosophy of man に対応するもので，個別の科学では把握しきれない人間全体の本質，意義，原理，特徴性などを学際的に研究する学問である。英語の“哲学的”という形容が示すように哲学をベースとしているので，哲学の一大要諦である“人間とは何か”という問題を追究しながら，成人としてのより広い視野に立つ総合的な自己の確立を目指していく」[39] という目的をもっている。

上智大学は，キリスト教的ヒューマニズムに基づく人間形成を教育理念とする大学であるが，哲学を基盤にし，倫理や宗教を踏まえ，かつ諸科学などの成果をも援用して，現実に生きる「人間とその生き方」を総合的に捉える総合コース「人間学」を，1969年以来，全学部の一年次生に通年の必修科目として開講してきた。この「人間学」は，「一般教育」カリキュラムの中核におか

れ，新入生のアイデンティティ形成の一翼を担うという点で，上智大学の一つの特色をなすものであるが，昨今の大学改革の動向の中で，「人間学」は全学共通科目に位置づけられて従来通り継続されている。長い年月の伝統に基づくとはいえ，7学部2000名以上に上る一年次生を学部学科毎に45コースにもクラス分けをし，これを25年以上にわたり継続して実施してきたことに，まず感服させられる。このような「人間学」を必修科目として運営していくこと自体，専任教員の数という点だけをとっても並大抵の労力ではないことは明らかである。上智大学の「人間学」のケースは，他大学では見られないだけでなく，到底なし得ない授業形態といえよう。

この「人間学」の教育と研究の母体となる教員組織が，文学部内の学科に相当する人間学研究室であり，「人間学」の主な担当教員は，ここに所属している。人間学研究室の発足は，「人間学」開講の翌年，1970年に遡り，既に26年の歴史をもっている。人間学研究室の教員構成は，一応哲学・倫理学・宗教学を基礎にしているが，ここの教員の専門分野は実に多様である。例えば，生命倫理学，哲学史，古代・中世哲学思想，西洋近世思想，日本倫理思想，キリスト教学，社会思想，カウンセリング心理学，仏教思想，生と死の思想，家族学，正義論などに及ぶ。

人間学研究室の活動は多岐にわたるが，授業や合宿の他，教員同士の研修合宿が毎年行われ，各年ごとの人間学的課題や長期中期の計画，「人間学」の教育方法，カリキュラム改革，成績評価の方法等をめぐる討議が交わされ，その成果が実際の授業に生かされている。人間学研究室の10年を越える研究成果が，「人間学」の授業で使用される共通テキストの刊行である。「人間学」の授業内容，その展開および参考文献等は担当教員のやり方に委ねられるが，全学生に基本的テーマを網羅した共通テキストが用いられている点に注目してよいであろう。テキストは，1975年に発刊された『人間学入門』（理想社）に始まり，1981年に改訂された『人間学』（理想社）と同年に刊行された『人間学』の姉妹編の『未来の人間学』（理想社）である。その後『人間学』には，幾度か改訂増補が加えられたが，現在使用の共通テキストは，1988年の『新版増補・人間学』を再改訂した1993年発行の『新人間学』（透土社）である。これらのテキストは，人間学研究室の10年以上にわたる共同研究の成果として専門分野も国籍も様々に異なる執筆メンバーの協力によって生み出された著作である。

ここで『新人間学』の構成とその内容を目次を主として略述しておく。[40]『新人間学』の構成の枠組みは，4つの視点から成り立っている。4つの視点とは，人間をトータルに考察し理解する上での立場であり，(1)外側からみた人間理解，(2)内側から見た人間理解，(3)環境とのかかわり，(4)深みの次元とのかかわり，という4部構成である。

(1)は，人類学の歴史と成果であり，人間の外的特徴とその起源，動物界とのつながりを解明したもので，「人間の由来」というテーマである。

(2)は，心理学的に見た人間の意識の発生と成熟の諸相を論じたものとして，「意識の発達」のテーマと内側から自己を見つめることの哲学的考察として，「意識―内側からみた人間」のテーマ，人間の自律と自由の発達史と実存的考察としての「自由―成熟と喪失，そしてあらたな成

熟」のテーマ，人間の道徳性を論ずるに当たって西洋思想に基づいてなされた価値倫理学的な考察である「モラル―西洋倫理を踏まえて」のテーマ，日本の倫理思想から見た道徳の問題として，「人間の歩むべき道―日本倫理を踏まえて」のテーマから成る。

(3)は，人間の文化や文明によって変貌を遂げた自然の世界とのかかわりの論を東西の伝統を踏まえた考察として，「自然とのかかわり」のテーマ，人間が他者との出会いと交わりを成立させるものとして，「対話」のテーマ，男女関係における愛，恋，性などの価値と可能性として，「成熟とエロス」のテーマ，豊かな結婚生活を営む場である家庭をいかに創造すべきかの問題として，「人間と家庭」のテーマ，正義と福祉，人間的社会の実現の問題として，「人間と国家の関係」のテーマ，そして国際的視野と現実的平和論の問題として，「国際的連帯性と人間仲間」のテーマから成る。

(4)は，日本人の死生観を中心とした「生と死」のテーマ，人間の生命のはかなさと超越的なものに心を開く人間の根源的な要求として「宗教と宗教心」のテーマ，そして最後に西洋思想の根底を流れるキリスト教的人間のヴィジョンを述べたものとして「キリスト教的人間観」のテーマから成っている。

以上のように，『新人間学』は4つの視点から成る4部構成で，15章のテーマを含み多様な内容が展開されている。すでに述べた通り，上智大学はキリスト教的人間形成を理念とする大学であり，『新人間学』の構成も，又人間学研究の内容も，「人間に関する理念や規範といった哲学的，倫理的，かつ宗教的な面が強く，実証的で科学的な面が手薄なような印象」[41]を与えるように思われるが，上智大学の人間学はキリスト教大学であるがゆえの独自性であり個性化を目指した研究の成果であって，それ自体重要な問題意識を提示していると考えられる。特に，25年以上にもわたって継続してきた「人間学」の教育的価値は，決して過小評価されてはならないであろう。上智大学の人間学の試みに，「ソフィア・ファミリー」の共同体意識の発露と教育理念をメンバー同士で本気に追求しようとする姿勢を見出すことができる。

尚，上智大学では，理念の学問の立場から主張している人間学を科学的で実証的な事実やデータをもって裏づける方向性，すなわち生物学や生理学，保健学，心理学，精神医学，人類学，社会学，教育学などの諸科学との協力と共同研究が進められて，科学的人間学を構築する試みが構想されているようである。

おわりに

本論では，人間科学とは何かという人間科学自体を問う問いについて，その輪郭を述べると共に，人間科学との関連で人間学とは何かという問いについても一定の輪郭を示してきた。既に述べたように，人間科学と人間学は相互に区別される学的視点に立つものであるが，積極的には両者が相補う関係にあり，本来密接な連携の下に研究が進められるべきであるように思う。人間学は，人間の本質と原理の探求の学であり，また人間の規範や価値，意味の問題とも関わる学であ

る。一方，人間科学は人間の存在および人間現象を一つの客観的事実として，その事実をあるがままに実証的に解明することにより，人間と人間現象を構成する諸要素やメカニズム，ダイナミズムに含まれる法則性を発見しようとする。両者は，これまで学的視点の相違から，相互に異なる研究方向を歩んできたといえるが，人間学ももはや理念や規範の学としてのみとどまる訳にはいかなくなった。新しい人間学は，人間科学の諸領域の成果から得られる実証的な事実や客観的なデータに裏づけられて，科学的に再構築される必要があるであろう。人間学が人間の全体像を理論的に総合的に考察する学であるならば，日進月歩の諸科学の成果を援用しながら，新しい時代を生きる人間観を呈示し得るに足る生きた科学的人間学を構築する必要があると考える。

本学人間科学科には，幸い人類学，考古学，教育衛生学，体育学，心理学，教育心理学，発達心理学，臨床心理学，社会福祉学，社会学，教育学，日本史，西洋史，社会思想史，哲学，倫理学，宗教学などの人間科学と人間学関連の専任スタッフが揃っており，これら教員の全面的協力によって共同研究が進められるならば，本学独自の個性的な科学的人間学を構築することが可能であろう。要は，人間科学か人間学かという路線の確立を目指す議論ではなく，専任スタッフの共同研究を取り入れた総合的な人間研究の成果が今一番求められているのである。

21世紀を直前にして，社会生活のあらゆる分野，例えば経済，労働，福祉，教育，家族，道徳などの分野に発生した人間をめぐる問題状況，あるいは地球上に生じている内戦状態，飢餓，難民，食糧問題，エネルギー危機などの分野の問題状況は，いずれを取り上げても問題自体が余りにも大きく複雑で，その解明と解決の見通しは容易に見出され得ない現状にある。人間科学科の専任教員は，自己の専門領域にのみ固執する事なく専門を踏まえつつ，さらにそれを越えて総合的な人間研究と新たな科学的人間学の構築を目指して共同研究を展開すべきであると考えるのである。

註

1）札幌学院大学『学園創立40周年大学開学20周年記念誌』「人文学部設置の趣意」1987，186頁
2）札幌学院大学人文学部『人文学部10年の歩み』1988，4頁
3）札幌学院大学人文学部　同上書，5頁
4）札幌学院大学人文学部　同上書，5頁
5）徳永恂『大阪大学人間科学部紀要第15巻』「人間科学とは何だろうか」1989，3頁
6）徳永恂　同上書，6～7頁
7）S・シュトラッサー『人間科学の理念』徳永恂・加藤精司訳「訳者あとがき」新曜社，1978，383頁
8）常盤大学人間科学部編『人間科学のすすめ』常盤大学，1995，14頁
9）常盤大学人間科学部編　同上書，18～19頁
10）常盤大学人間科学部編　同上書，25～26頁
11）常盤大学人間科学部編　同上書，27～29頁
12）水島恵一『人間性の探求』人間性心理学体系第1巻，大日本図書，1985，327頁
13）ラルフ・リントン編『世界危機に於ける人間科学』池島重信他訳，実業之日本社，1952，6頁
14）ラルフ・リントン編　同上書，7頁

15）大学問題コロキウム編『大学の原点』「対話する大学を求めて」理想社，1972
16）大学問題コロキウム編　同上書，14頁
17）大学問題コロキウム編　同上書，15頁
18）大学問題コロキウム編　同上書，17～18頁
19）大学問題コロキウム編　同上書，18～19頁
20）S・シュトラッサー　前掲書，6頁
21）S・シュトラッサー　前掲書，7頁
22）K・ヤスパース『現代における理性と反理性』橋本文夫訳，理想社，1974，29頁
23）斎藤武雄『実存と教育』創文社，1976，53頁
24）斎藤武雄　同上書，34頁
25）K・ヤスパース『歴史の起源と目標』重田英世訳，理想社，1964，160～161頁
26）M・シェーラー『宇宙における人間の地位』亀井裕・山本達他訳，白水社，15～16頁
27）M・シェーラー　同上書，128頁
28）藤田健治『哲学的人間学』紀伊国屋書店，1970，91頁
29）ホアン・マシア『限界の哲学』南窓社，1988，16頁
30）ホアン・マシア　同上書，16～17頁
31）久保田勉・稲垣良典編『人間の探求』名古屋大学出版会，1988，1～2頁
32）金子晴勇『人間学としての哲学』世界思想社，1995，11頁
33）金子晴勇『人間学』創文社，1995，1～2頁
34）金子晴勇　同上書，5頁
35）水島恵一　前掲書，327頁
36）水島恵一　前掲書，328頁
37）土沼雅子・水島恵一『人間性の深層』創元社，1982，249～250頁
38）土沼雅子・水島恵一　同上書，250頁
39）A・デーケン「上智大学における人間学の特色から」『一般教育学会誌』一般教育学会，第10巻，第2号，11頁
40）A・デーケン　同上論文，12頁
41）越前喜六「教育を視野に入れた科学的人間観を目指して」『人間学紀要』上智大学人間学会，20号，7頁

（いくた　くにお　本学人文学部教授　宗教学専攻）